科学技術政策担当大臣と有識者議員との会合 議事概要

日 時 平成 23 年 3 月 10 日 (木) 10:00 ~ 11:20

場 所 合同庁舎 4 号館第 3 特別会議室

出席者 阿久津政務官、相澤議員、本庶議員、奥村議員、今榮議員、白石議員、青木議員、
中鉢議員、金澤議員、泉統括官、梶田審議官、吉川審議官、大石審議官

議事概要

1. 科学技術分野における人材育成について

< 有松参事官、衆原参事官説明 >

本庶議員 第 4 期科学技術基本計画における科学技術人材育成というのは非常に重要な課題だと思
います。最初にこれが出てきたというのは、私は大変結構だと思いますが、第 4 期
中における大きな目玉と言いますか、項目は 4 つあります。一つは、ここで語られた大
学院教育の改革、それから、女性の雇用、それから、テニユア・トラック、この 3 つは
ここで述べられておりますが、1 つ抜けているのが、外国人研究者を 10% 雇用するとい
う数値目標入りの提言が第 4 期には入っております。それが今回の有松参事官の報告で
は抜けておりますので、ぜひこれも入れてアクションプランでは検討するということに
していただきたいと思ひます。

奥村議員 人材育成ワーキングを担当させていただいて気が付いた、日本の大学院教育の問題点
というのは大きくは 2 つあるということです。一つは、このアンケートにも出ています
ように、いい教育をされている大学院もあるし、そうでないところもある。基本的
に国全体として、大学院教育の品質保証するという制度はなく、大学生の卒業である
ならこの程度のことを知っていてできるという、卒業生の質の水準が各大学あるいは大
学院に完全に任されていることです。質の水準のばらついた人材、卒業生を受け入れる
企業のほうからみますと、非常に混乱が起きるわけです。まずい教育を受けた学生さん
が社会に出ると、大学・大学院教育に対する社会の信認を失うということが大きな問題
だろう。このレポートの例にも出ていますが、イギリスでは分野別品質保証という仕組
みをつくって、授業の質、修得のレベルを、外部の大学の先生が相互チェックして品質
保証するという国全体の仕組みをつくっているわけですが、日本にはそういう仕組みは
ない。

それが一点と、もう一つは、より基本的ですが、大学・大学院の基本的機能が、ほか
の国では「教育」と「研究」とに大きくきちんと分別されている、日本ではそれがなぜ
か一体化されている。教育と研究とでは明らかに目的と対象が違うわけです。教育は学
生を相手にしますし、その育成ということが目的です。研究は教員の自由な、ある意味
では教員自身のオプションです。したがって、この二つは対象が全く違うのになぜかこ
れが一体化されて運営されている。最近極めて由々しきことだと思ひていますのは、競
争的研究資金を獲得できる先生を外部から呼び込みたがる大学が増えていることです。
研究要素はあまりないが、基本的な教育に造詣の深い先生の居場所はだんだんなくなる

という現象が起きていると、伺っています。ということで、大学・大学院の役割を教育と研究を基本的に分けて運営するということが一番根本だろうと思います。

青木議員 少し議論が細かいところになりますけれども、この新しいテニユア・トラック制というのはすばらしいと思うので、うまくいけばいいなと思っています。最近ほかの先生たちとテニユア・トラック制の重要性を議論していて気がついのですが、テニユア・トラックの前提というのは、全員を任期なしに採用するというのではなくて、もし実績が上がらなかつたら、きつい言葉ですけれども、「首にしますよ」というので、そこが日本の習慣としてないのですよね。アメリカなどは、アメリカの経験しかないのでそういう議論になってしまうのですけれども、テニユア・トラックの選考のためにもすごい知識を蓄積して、エネルギーを使っているわけですけれども、それがまだ日本には足りないような気がします。この資金を与えるのと同時に、資料と言ったらおかしいですけども、ノウハウももう少しわかるように情報提供していただけたらいいなと思います。よろしくをお願いします。

金澤議員 第4期のことに限定するというのと少し枠を外れるかもしれないのですけれども、人材育成という、人材はともかくとして育成ということに関連して、総合科学技術会議でもいろいろところで議論はされているし、大事な議論はされているけれども、若いときからずっと通して研究者として成功していくまでの、言うならば一生を通しての流れを見ながら育成というのは考えなければいけないのではないかと。例えば、大学院の時期に関しては確かにこういういろいろな施策が行われていいわけですし、大事な育ち方をしたいと思います、その前の段階というのは一体どうなっているのか。今、奥村議員が言われたように、大学の学部では非常に優れた人たちがどんどん育っているかということ、決してそうではないように思えて仕方がないわけですね。文科省のほうでもそれを問題にされて、学部における学生の質の保証を考えなければいけないということで、学術会議に問いかけをいただきまして、今、答申を出しているところです。

そういう中で見えてきたのは、学部の学生という点からいきますと、ほかの国と比べて、日本の大学生は、一般的にですけれども、非常に残念ですけれども、あまり勉強する学生たちではないように見えますし、それが、さっき奥村議員が言われた外から受ける側から見たときに非常に評価が低いということとつながっていくように思えて仕方がないわけですね。それでは、そういう学生はどうして育ってしまったのかということ、高校時代はどうか、大学受験にまみれてしまって本当にどうしようない。では、高校生はどうなのかということ、中学校、そして小学校と、こういう形でどんどん前にさかのぼっていくわけですね。そういう見方というのは、この総合科学技術会議でそこまでやるべきかどうかに関しては当然ながら問題があります。

私は将来的にはやるべきだと思っていますけれども、今の段階では難しいと思いますが、例えば7ページのように、若いころからの施策に対しても目配りが一部できているわけですね。むしろその辺を一体どこまでさかのぼっていいのかが。端的に言いますと、試験の制度というのが日本においては非常に大きな意味を持っていると思いますので、そういう問題にまで話を持っていくことが、この総合科学技術会議では非常に難しいのではないかと。学術会議で最近育成に関する、あまりいい言葉ではないのですけれども、「一気通貫」という言葉を使っているのですが、若いころから研究者として成功するまでの間を通しての育成というものに対しての根本的な見直しをしてはどうだろうか。例えば、文科と理科を分ける、文系と理系と分けることを高校の2年生で行うということの是非であるとか、様々な問題があつてここでは扱いきれないかもしれませ

んけれども、そういう問題の一番上にこれがあるのだという理解をしながらやらないといけないのではないかと考えております。

白石議員 この1ページから6ページのところは、箇条書きでくり出すとこういうことになるのですけれども、例えば2ページの大学院教育の抜本的強化というところを一つ見ましても、ここはものすごく大事だと思いますけれども、リーディング大学院形成促進などというのは、この大学院教育の抜本的強化を達成するための方法であり、同時にそれがもう一つ下のレベルでの課題になっている。それに対して、例えば大学評価基準・指標の整備とか、大学院教育の見える化というのは、それ自身は目的ではなくて、あくまで大学院教育の抜本的強化のツールなわけです。

こういうふうに並べてしまうと、そここのところがはっきりしないのですけれども、ツールはツールとしてはっきりさせて、大学院教育の抜本的強化のためには、例えば大学評価基準・指標の整備というツールを、ツールとしてきちっとつくるにはどうしたらいいのかということを考えていただかないと、こういうふうに並べて、形だけ指標をつくりましたと言われたら、本来の基本計画の趣旨から非常に外れてしまうのです。ですから、そここのところをぜひ、これは文科省にとっても非常に重要な課題なので、連絡を緊密にしてお願ひしたいと思います。

相澤議員 ただいまのご指摘は非常に重要だと思います。先ほど金澤議員が指摘された教育体系を全体的に見るとということと、今、白石議員のご指摘は、大学院だけとってこういう個別施策だけを並べるのではなく、全体的なとらえ方を失わないということだと思いますので、ぜひこれは検討してください。

今榮議員 今回のアンケートで、キャリアパスの情報を得ていないというのが40%以上もあるということは、私は非常に危惧していた結果が出たかなと考えております。と言いますのは、今回、3ページですか、育成の幾つかのこれからやるべき課題があるのですが、そういうものが本当に現場の学生に浸透しているかということ、実はあまり十分ではないのです。実際に学生に聞くとテニユア・トラック、それは何ですかとか、女性支援というのは、そんなのがあるのですかという学生が結構いるのですよね。学生だけではなく研究者でも。

それからもう一つ、例えば国際公募という場合なども、一旦外国に出てしまうとなかなか日本の情報が入らない。そういうときにどこを見れば探せるかということ、自分の所属している学会とかですね。大学から出てしまうとそれも消えてしまって、ほとんどそういう情報が入らないから、一たん出てしまうと日本に帰るルートがないというような感じになるので、その辺の情報の流布と言いますか、そういうツールをもう少し確保するといいなと考えております。

相澤議員 それでは、ただいまいろいろとご指摘いただいたことを基に、今後の進めるところに資していただきたいと思います。

阿久津政務官 先ほどの金澤先生のお話は非常に興味を持ちました。日本の大学院教育全体につながってくるのだと思うのですけれども、教育全体の中で考えていただいて、結果どういふふうにしたいかということ、もう少し気軽に大学院にも行けるような形の中で、大勢の中から優秀な研究者が残るみたいなことも、もしかしたら先生方のご意見が違つかもしれないのですけれども、日本全体のレベルアップにつながるのではないかなと思ひました。

相澤議員 ありがとうございます。

総括的フォローアップ（分野別推進戦略）の検討状況

< 只見企画官説明 >

奥村議員 事務的な確認をさせてください。まず5ページの表2 - 2というのがありますよね。

只見企画官 基本 - 2の資料ですね。

奥村議員 基本 - 2の資料です。それに2 - 2という表があって、これは年度別展開されていますが、ここには第3期科学技術基本計画の予算合計、21.1兆円を記入したほうがわかり易いと思います。

それから、その次のページの6ページ、表2 - 4の一番下を見ますと、分野別には8兆6,000億円使っているということになりますよね。そうすると総額が21兆円ですので、約4割をここで使ったということで、残り6割はどこにいったかということ、その下に書いてある基礎研究とシステム改革だと、そういう理解になりますよね。それで間違いないですね、という確認です。

只見企画官 はい、そういう整理でございます。

本庶議員 基本 - 1の3ページのまとめ方の案ですが、一番重要なところは最後にどういうふうな総括をするかということになると思います。ここに各PTのそれぞれの分野の総括を単に並べるだけでは具合が悪いのではないかと。つまり、全体を通してこの仕組みで何が問題であるかということを書かなければいけない。これは幾つかあると思いますが、私どもが感じている最大の問題は、きちんとした評価というか、PDCAサイクルが行われていない。ほとんどこの評価というか、できたという話は、各省庁の中で具体的にどういうプロセスがあったかはそれぞれ違うと思いますが、そういうことがどちらかという総括に出てきている。そのプロセスの中で、いわゆる第三者評価とか、コスト・パフォーマンス的な視点からの評価が、第3期では残念ながら入っていない。これを総括してきちっと書いて、第4期に関してはその点を明確にしていかなないと、これだけのお金を使っているということに対する説明責任もあると、そういう総括、それは一つの例ですけれども、そういう全体像の総括をぜひ入れていただきたい。

奥村議員 全く同意見でございます。全体をわたった運営を含めて、たとえば分野別PTがそもそも何をする場なのかというミッションも明確にしないまま動いて来た経緯もあります。研究開発を俯瞰するレフリーなのか、各分野でのプレイヤーなのか、判別しないということも混乱を起こしている一つの原因なので。これは第4期の運営に関わる話でもありますので、分野ごとの羅列ではなくて、分野を超えた課題についてきちっと抽出し、記述すべきだということには同意見でございます。

相澤議員 それでは、ただいまのご指摘を踏まえて、最終段階のまとめのところに入るようにしたいと思います。

議題3．戦略推進費について

(来年度予算案に関する事項であるため非公開)

議題4．第97回総合科学技術会議について

(会議開催に向けた事務的な打合せであるため非公開)

(以 上)